

第10回 村上正二賞の選考について

村上正二賞選考委員会

第10回(2016年度)村上正二賞選考委員会は、2016年刊行の『日本とモンゴル』132号、133号に掲載された諸論文を対象に慎重に選考をおこない、第132号に掲載された鈴木由紀夫氏の論文「気候変動とモンゴル」に村上正二賞を授与するのが適当だという結論に達した。

選考理由は以下のとおりである。

鈴木由紀夫氏は、『日本とモンゴル』の特集「現代モンゴルの諸相」に毎号、モンゴルの農牧業や鉱業にかかわるテーマで寄稿してきた。同氏の研究においてひとつのはしらとなってきたのは、自然保護の立場から、モンゴルにおける環境破壊に警鐘をならすという姿勢であり、今回直接受賞の対象になった「気候変動とモンゴル」も同様の性格を有している。

本論文で鈴木氏はまず、典型的な乾燥地帯であるモンゴルでは三四半世紀のあいだに気温が約2度も上昇しているという事実を確認し、そのうえで、永久凍土面積の減少による影響の重大性を指摘している。国際的なわくぐみのなかでCO₂削減がどのようになされようとしているかを丁寧におさえたうえで、モンゴルでの対応の仕方を記述するという手法をとっているが、論点がたいへんよく整理されていて、気候変動の影響をうけやすい、脆弱な自然環境を有するモンゴルの環境問題を理解するうえで最良の入門的論文としての役割をはたしうるという点がたかく評価された。

村上正二賞論文募集

日本モンゴル協会 総合研究所

本研究所では、「村上正二賞」の対象とする、モンゴルに関係するテーマの論文を募集しています。テーマは、純学術的なものに限定されず、モンゴルに関する、あるいは日本・モンゴル関係にかかわる、さまざまなものもふくまれます。

枚数は、A4版（Word, 33行、38文字）で、図版をふくめて、15枚程度です。電子媒体（CD-ROM）とプリントしたものをおおくりください。しめきりは、2017年12月31日です。

応募論文は、審査のうえ、最優秀論文に「村上正二賞」をおくります。応募論文以外に、『日本とモンゴル』誌に掲載された論文も審査の対象となります。応募論文が、「村上正二賞」の対象となった場合、『日本とモンゴル』誌の春の号に掲載されます。

「村上正二賞」の賞金は10万円です。

応募は日本モンゴル協会の会員にかぎりませので、非会員の方は、投稿の際に入会のごつづきをおとりください。なお、提出原稿は返却いたしませんので、ご承知おきください。

論文提出先：

〒162-8644 東京都新宿区戸山1-24-1 早稲田大学文学学術院 柳澤 明 研究室
公益社団法人 日本モンゴル協会 Tel: 03-5286-3697

（過去の村上正二賞受賞者）

- 第1回（2007年度）： 青木隆紘「“モンゴル音楽”の20世紀小史—モンゴル国の音楽文化研究に向けて—」
- 第2回（2008年度）： 上村明「21世紀モンゴル国における牧畜——国際援助におけるProperty-rights Approach批判——」
- 第3回（2009年度）： ホルチャー（胡日查）「『満洲国』の対モンゴル民族政策の調整と蒙政部の設置——興安総署から蒙政部への改編を中心に——」
- 第4回（2010年度）： リンチン（仁欽）「内モンゴル生産建設兵団の建設とその特徴」
- 第5回（2011年度）： サイジラホ「内モンゴルのフルンボイル地域におけるシャマンとバリヤーチの加入儀礼」
- 第6回（2012年度）： ボラグ（宝力嘎）「『スーホの白い馬』は本当にモンゴルの民話なのか」
- 第7回（2013年度）： 平井貴幸「新しい第2世代の新興国としてのモンゴル」
- 第8回（2014年度）： 娜仁格日勒（ナランゲレル）「中共による内モンゴル騎兵部隊の解散までの軌跡：『モンゴル騎兵チベット鎮圧』の知られざる実像を求めて」
- 第9回（2015年度）： 娜荷芽（ナヒヤ）「1930～40年代の内モンゴル東部におけるモンゴル人の活動—文化・教育事業を中心に」
- 第10回（2016年度）： 鈴木由紀夫「気候変動とモンゴル」